

この月に入つて、空襲もようやく熾烈であつた。アムトウチカ島の敵飛行場は、着工以来一ヶ月で、すでに一月下旬から戦闘機が発着し、二月末には重爆の使用も可能になつていたのである。

それにひきかえ、二月までに概成を命ぜられていたキスカ飛行場(800×120)は「何物ヲ犠牲トシテモ」資材及び人員の不足のため、まだ、どれほども進捗していなかった。

最初「適地ナシ」と判断されたアツツ島も、この情況で、ホルツ湾東浦地区に長サ千百米幅員二百米の飛行場を三月末迄に概成すべく命ぜられた。二月二五日着工、しかし、積雪多く工事は困難を極めて、三月末、その五割の概成をみたにすぎなかつた。

9

〈負けてはならない

頭張つてみよう　それが如何に無駄と徒勞であらうと〉

三田のような初年兵は、惜しみなくあらゆる労役に使われた筈だ。毎日の飛行場作業に陣地構築に、流木ひろ

い、資材運搬に、そして、兵器手入、飯^{イシヤ}上げに。

炊事当番の使役になつて、海岸から、うんとこさ海藻を集め背負わされてくることもあつたらう。時には魚採りという案外楽しそうな役まわりを命ぜられたりもしたろう。

このあたりには、赤い色の大きな嘴をもつ鶏ほどの大きな海鳥がいて、竹ざおで叩いてもとれるという。三田も、その愚かな鳥を追かけまわしたかもしれない。

そして、深夜の不寝番に、やはり手帳にあるような感懐にふけつていたのでらうか。

〈俺は、むしろ

この雨風を抱きしめる〉

10

三月下旬、北方軍司令官は従来のキスカ中心主義から、速かにアツツ中心主義に移行するように決定した。

しかし、同二十五日、第五艦隊主力の護衛でアツツに向つた輸送船団は、アツツ前方二百哩の海面で、敵有力艦隊に遭遇、遂に輸送を断念して幌筵に帰投する状況で

あつた。このようなことをくりかえすこと前後五回。北海守備隊に増強されるべき兵員の輸送中戦死したものは四百九名を数え、しかも大部分（約五千七百名）は、内地をまだ出港することもできないでいたのである。

すべては、机上プランにすぎなかつた。

アツツ島では、すでに主食定量を六〇％にさげねばならなかつた。兵器弾薬はもとより不足、通信器材に至つては、主要部隊間にやつと有線電話を架設しただけで、連絡は、たいてい徒歩によつていた。

陣地もまた蝟壺を主にし、火砲・重火器・観測所は擬装する程度の貧弱なものであつた。例の流木や建材を利用して、重点面での水際陣地の一部に僅かに、軽掩蓋を施したが、他までは、手がまわらなかつた。

肝腎の飛行場も、出来る限りの作業人員を使つて、なお、辛うじて五月末概成の見込みしか立たなかつた。

だが、五月下旬になると、アリューシャンは急速に暖かくなり、濃霧がたちこめて、海上も静穏になるはずであつた。その霧期は八月まで続くのである。その濃霧にかくれてなら、輸送も可能であらう。北方軍は、それを待つていた。

四月になつても、相かわらず凜冽の風であつたが、空襲は、月をおつて倍加してくるはげしさであつた。B・24、25、P・38、40、あらゆる種類の敵機が日に何度も来襲した。

それに、一日ましに日がばかに永くなつてきて、皆、寝不足であつた。

四月十五日、北海守備隊長（少将峯木十一郎）は、作戦指導のため、潜水艦によつてキスカからアツツに渡つた。第二地区隊長（大佐・山崎保代）もようやく到着していた。

そして、その作戦指導の終る二十七日の朝三時——もう明るかつたが——アツツ島は、北海岬沖の敵巡洋艦三、駆逐艦六から、四十分間にわたつて第三回目の艦砲射撃をくわえられた。軽傷四名、家屋大破三、探信鏡小破の犠牲にすぎなかつたが、短時間に前回に倍する弾量をもつてする攻撃ぶりは、敵の決意をうかがわせるに充分な激しさであつた。

五月一日、峯木少将は、再び潜水艦によりキスカに帰つた。

もう春であつた。雪はとけはじめると早かつた。風も静かになつた。

12

アツツ島の守備態勢。

○北海守備第二地区隊本部 長 中佐山崎保代 子チ
ヤゴフに位置す。

○チチャゴフ湾小地区隊 (長・渡辺小佐)

独立歩兵第三百三大隊の主力

北千島要塞歩兵隊第一中隊の主力

第六要塞山砲隊

独立工兵中隊の一小隊

○ホルツ湾小地区隊 (長・米川中佐)

北千島要塞歩兵隊の主力

○マカッサル湾小地区隊 (長・林中尉)

独立歩兵第三百三大隊第一中隊

○防空隊 (長・青戸少佐)
独立高射砲大隊の主力

○地区直轄部隊

独立工兵中隊の主力

独立無線第十一小隊

北千島要塞歩兵隊通信班

碇泊場司令部熱田支部

野戦病院大浦班

○地区予備隊

北千島要塞歩兵隊第三中隊の一小隊

独立高射砲大隊第四中隊

○海軍部隊

熱田基地海軍部隊

海軍電波探信儀設定班

○野戦郵便局

兵員総計 二千六百十四名。

五月十二日、日出〇一二二 日没一六五二。

気温6〜13° 北東ノ風、風速一〜三米。

〈終日濃霧山腹ヲ這イ、視界良好ナラズ、五十米乃至五百米。〉

この日、日出と同時にじまつた空襲は、午前二時を過ぎると、ますます執拗になつていた。機影は殆んど捕捉しがたかつた。時々銃爆撃の音がとだえると、霧の中からピラが舞いおりてきた。しかし、それもほんの僅かの間、再び始まる敵の攻撃は、前よりも一層はげしさを加えてゆくような気がした。不意に、大きな白いものフワリと浮ぶ——落下傘だと思ふまでもなく、それは物すごい轟音と共に、爆発し、煙があたりを暗くする。消えのこつていた雪は、泥土にまみれ四散してしまつた。

へ一〇〇〇 ホルツ湾西浦沖ニ優勢ナル敵船団を発見

〈戦艦二、空母二、甲巡四、乙巡四、駆逐艦七、ワレ

ヲ砲撃中、輸送船約三〇ヲ認ム〉

へ一〇三〇、敵ハ主力ヲ以テ、マカッサル湾ヨリ、有カナル一部ヲ以テホルツ湾、西浦北海岸、及び、サラナ湾ニ舟艇ニヨリ上陸シツツアリ、サラナ湾北方ニ於テハ之ヲ撃退ス

要するに、南北岸より同時に上陸されたのである。

敵はカルホルニヤに駐屯していた歩兵第七師団（長・少将ランドラム）であつた。明らかに山嶽戦闘の訓練を経てきたとおぼしく、軽装、スキー・スパイク靴を使用して、「徒兵力ノ行動ヲ許サズ」と判断していた断崖、峻嶺を容易に突破して、守備隊の側背に滲透して来た。しかも火力装備は我に数倍し、射撃能力も優秀であつた。地形地物を巧みに利用しては、身軽に行動してくる敵兵の姿は、何か西部劇の中の人物のようであつた。

砲爆撃もいよいよ熾烈であつた。敵は上陸直後、西浦西北、峻峻な芝台高地に打込み道路を作り、二時間後には、十糧加農砲を進入させていたのである。

ホルツ湾小地区隊は芝台に、マカッサル湾小地区隊は、天狗山・將軍山・荒井峠・獅子山・雀ヶ丘の線に後退せざるを得なかつた。

〈敵ハガス、弾ヲシキモノヲ使用ス。十榴ニヨリ普通弾ト混用シテ我が砲兵陣地ニ対シ射撃セリ。九々式防毒面ニテ防護完全ナリ。但シ皮膚露出部ニ刺戟感ア

日没をまつて、守備隊は一部兵力に当面する敵の攻撃を命じたが、それほどの効果は認められなかつた。

14

北海守備隊長は、五月下旬よりの霧輸送をくりあげ、幌筵、北海道に待機中の諸部隊を直ちに敵前上陸の要領を以て強行輸送されるよう、北方軍に意見具申の電報をうつた。彼の判断では、少くも歩兵六ヶ大隊、砲兵二ヶ大隊、高射砲二ヶ大隊、工兵一ヶ大隊の増援を必要とした。そして、また、それに近い兵力が後方の港で空しく日を送っている筈であつた。

五月十四日、北方軍司令官は、優秀船六により歩兵三大隊、山砲一大隊、工兵一中隊、計四千七百名の増援準備を命じた。

大本営は、敵海上勢力を撃破後、速かに増援するようの方針を決定した。

だが、大本営は、敵海上勢力の撃破を、どんな方法でやろうとしていたのだらうか。案外、撃破後の「後」の字一つが参謀が智慧をしぼつたところではなかつたのか。つまり、撃破後でなければ行けないということをも、

従つて、その作戦は中止するという伏線を予めそれによつて示しておいたのではなかつたか。

アツツ島の糧秣は、十日現在、減食して五月末までやつとの集積しなかつた。

15

五月十三日。風は南にまわり、やや強かつたが、前日と殆んど同じような天候であつた。濃霧に砲煙が、どんよりと漂つて、重く暗い感じであつた。被服はしめつぱく皮膚にまつわりついて、誰もが泥だらけであつたが元気は失わなかつた。

午後、一時半、ホルツ湾から突然水柱が二つあがり、夜になつても、黒煙と炎が霧の中に見えた。我が潜水艦による戦果であるらしかつた。

マカッサル湾では、駆逐艦が擱坐しているのが、霧の切れ目から見えた。

この日までの戦死五九、戦傷六四。

五月十四日。この日も濃霧の中の戦闘であつた。芝台西方、及びマカッサル湾海岸に敵の幕舎が見えた。旭柳半島からサラナ湾岸にも侵入して来た。守備隊は各処で更に後退した。